

今月の軽井沢

細江久美子（撮影・文）

フジとツツジ咲く公園にて



軽井沢の中心を流れる湯川、その川沿いにある湯川ふるさと公園。
すっきりと晴れ渡った風薫る5月下旬、フジの花が満開でした。
フジの花の甘い香り、美しい新緑、色鮮やかなツツジ。
初夏の軽井沢はきらきらと輝いています。

（撮影日 5月24日）

不能・恋する青年のいる

大岡 信

気違い (ママ) にもならず
自分の崇拝するものと
自分の生活に予見するものとの
矛盾に堪えうる青年が
いるだろうか
ある日アンリ・ベイルは書いた

恋する青年はみな
不能の悪夢に心臓を
ぶち抜かれているあわれな
気違いだ

だが私が
静かな気違いだからといって
顔をそむけるだけの値打ちもないと思うな

不能者にしかできない
崇高な恋があるのだ
この宇宙の
バリケードのなか
いたるところに

『透視図法……夏のための』より

『タイムマシン心理療法 — 未来・解決志向のブリーフセラピー』黒沢幸子（日本評論社）という本がある。クライアントに未来のなりたい自分を想定してもらい、その未来から現在を照射する、というのが基本の方法である。

東京周辺の中都市で私がスクールカウンセラーをしていた時、中学生の女子生徒が担任に連れられて相談室にきた。聞けば、彼女は親ともうまく行かず、友人関係もトラブルが続いているという。

しばらく彼女の現状と落ち込んだ気分を聴いた。その後「あなたは将来どんな仕事に就きたい？」「看護師さん」「もう決まっているのね。15年後、あなたはいくつで、どんな看護師さんになっている？」「27歳。5年くらいの経験がある、優しくて、頼りになる看護師さん」。私のすることは質問だけだ。「その人はあなたにどんなアドバイスをくれる？」

詩にもどろう。幼い子どもは、少年・少女になり、やがて青年になる。そのプロセスで人は理想と現実の乖離に苦悩するだろう。だが、このギャップこそが、人を、社会を成長させる発条になる。

大岡信：1931-2017 静岡生まれの詩人・評論家。新聞紙面の「折々のうた」選者として親しまれた。

ことばのキャッチボールで変容していく1年生
——支援員としての関わりの日々から

川崎佳子（こども支援士）



<ゆう君の最初の作品>

○ 気分がむらがあるゆう君（1年生）の作品が完成するまで

ゆう君は気分がむらがあり、最後まで取り組むことが難しい子だった。

ゆう君の絵は、暗い色、特に黒が多い。なぐり書きのようなタッチで、構成にまとまりがない。展示会の作品に取り組んでいる今回の絵には、珍しく明るい色が使われていた。絵には真っ赤な塗りつぶしの箇所があり、「しっかりぬっているね。これはなに？」と、聞くと「山」と答えが返ってきた。

私はゆうくと対話した。

「山には、ねんねしてる山、死んでしまった山、かっかと活きている山があるんだよ。

ここでもんだいです。富士山はどれだ？」

何を言っているのかと、首をかしげているゆう君。

「富士山は、昔々、かっかとぼくはつしていました。今はねんねしています。富士山はきれいだよね。今ねんねしている富士山のおなかは、ゆう君が描いた赤のように、真っ赤に燃えているんだよ。ゆう君はそのおなかを描いたのかな」

じっと聞いていたゆう君。なにを思ったか、今まで描いた絵をぐるりと裏返し新しい絵を描き始めた。

一度描いた絵とは全然違う雰囲気絵である。

頂上は、とがった形の真っ赤な色。その下はオレンジ。おなかは青を二色に使い分けた色彩。空には雲が浮かび、雲の近くにはゆう君の好きな黒の彩色があるが、完成した作品には見事なまとまりが見られた。

新しい作品にはゆう君のメッセージが込められている。安定感のある構図の中には大地が描かれ、その上に建つ家の中には、両手を広げた楽しそうな自分自身が描かれていた。



<書き直したゆう君の作品>

○ 「どうぶつの親子」を制作したはる君（1年生）

はる君の作品「なかよしおやこ」制作の過程でこんなことがあった。

図工の時間は、子どもたちが図工室に移動する。私は少し遅れて図工室に入った。図工専科の指示を受けて、どの子どもも椅子に座り、はさみを使い、紙を切り制作に取り組んでいた。

はる君は、一人、教室の隅のほうで、床に足を投げ出し、半分わめきながら、紙を小さくちぎって投げ散らかしていた。かんしゃくを起こしていたのは、制作が思うようにいかないからようだった。



<紙屑から変身したはる君の作品>

私は、はる君のそばに座り、小さくちぎられた紙屑のしわを伸ばし、二つに折り、半月に切り、それをたくさん作り始めたが、はる君は関心を示さない。叫んだり、ぶつぶつ言ったりしている。私はその横で紙屑のしわ伸ばし、それを半月に切る作業をひたすら続けた。半月の形はその背中を押すと、ゆらゆらと揺れる。ゆらゆらとゆれる半月の形は、どんどん増えていき、私はそれを指さしながら、声をかけた。

「はる君、すごいね。ゆらゆらゆれてるよ。きみも作ってみる？」

「やる！」と返事が返ってきた。「じゃあ、好きな色の紙をもってきていっしょに作ろうよ」

はる君は自分から好きな色の紙を取りに行き、そこからは機嫌よく作品作りに取り組んだ。

半月の形から、はる君は「どうぶつのおやこだよ」と言いながら作品を完成させた。

○ 納得して作品を完成させたりょう君（1年生）

りょう君は、入学当初から先生の指示に素直に従えない、納得しないと前に進まない、うまくいかないと言くと泣くといった学校生活が続いており、お母さんは「納得するまで時間がかかるんです。」と

悩んでおられた。

入学して初めて絵を描く日、4月19日。

四つ切の画用紙に「じぶんのすきな太陽をかこう」の作業が始まった。

りょう君は、大きな画用紙の左隅のほうに、小さく太陽らしき絵を描いた。その右横にも小さな太陽を描いた。気に入らないのか、左端の太陽を消し始めた。

私はすかさず「これはすばらしい。消したらだめだよ」と声をかけた。

ほかの子の作品を見回る間に、りょう君の画用紙には、黒のクレヨンで「きさまはだれだ」との文字が。

担任から「字はだめだよ。」と注意され、手で消し、ティッシュで消す作業を始めた。

「消えないから水で消す！」と言い始めた。画用紙の中心部は真っ白のまま。

今度は「新しく書き直す？」と担任に声をかけられ、突っ伏して泣き始めた。

私はりょうくんのそばに行って、別の紙に黒で字を書き、その上を、紫、緑、青などで塗りつぶしてまるの形にして、紫の○、緑の○、青の○などに変身させていった。



<りょう君が満足した作品>

左上の太陽は最初に描いた太陽。右上のいくつかの○は、文字を書いてしまったところ。濃い色で○を重ねて、文字が消えている。

「りょう君、こうすれば字は消えるよ。黒い字が変身するよ」と言いながら、作業を続けた。なかなか乗って来ない。あきらめずに作業をしていると、やっとやる気になり、一気にやりとげて、太陽の絵は完成した。

出来上がった作品は、中央に紫色の大きな太陽。その周りには、その太陽を取り囲むように、黄色、緑、青、オレンジなど明るい色の小さな太陽が描かれていた。

こうして、「きさまはだれだ！」の黒い文字は変身し、見えなくなっていた。

りょう君は「先生、なんていう名前？」と私に聞いてきた。

帰りに「今日いい日」と私に言いながら、「えも、かけた。たいようも、かけた。きゅうしょくも、おいしかった」と言った。

それ以来、帰りには必ず「さようなら」と声をかけてくれるようになったりょう君。

1年が経ち、3月にお別れの手紙を子どもたちがくれた。その中にあったりょう君からの手紙は、

かわさき先生へ

ずこうのさくひんをほめてくれてありがとう。ぼくがたいようのさくひんをつくっているときもじをかいちゃつたとき、かくすほうほうをかながえてくれてありがとう。ずこうのとき『きみはてんさいだ。』ていってくれてありがとうございます。

この1年かん、ほんとうにありがとうございました。1ねんかんおつかれさま。また1ねんかんがんばってください。

りょう君の手紙から「4月、自分はずまずいた。だけど助けてくれたから、乗り越えられた。自信がついたよ。ありがとう」の思いが伝わってきた。

子どもたちとの日々は、このような身近な感動にあふれている。言葉で傷つき、自信をなくしていく子どものニュースに心が痛む。子どもはいつもできるようにになりたい、ほめられたいと思って毎日を生きている。

先進的な特別支援学校の現場から

宮川隆史（副校長マネジメント支援員）

海外の日本人学校勤務を終え、都立α学園（特別支援学校）で、副校長の業務の補助をしながら3年目に入りました。肢体不自由部門（小中高）と知的障がいのある生徒対象の高等部就業技術科の二つの学校が一つになったような学園ですが、ここでは就業技術科の様子についてご紹介します。

○ 就業技術科の概要

東京都の知的障がい部門の高等部には「普通科」「職能開発科」「就業技術科」の3種があります。知的障がい部門の高等部の主たるミッションは、「自立支援」と「就労支援」ですが、大雑把に言うと「自立支援」の色合いが強いのが普通科で、「就労支援」に特化しているのが「職能開発科」「就業技術科」です。「普通科」には入学者選抜がありませんが、「職能開発科」「就業技術科」には入学者選抜があって、選抜された生徒が入学することになります。「職能開発科」「就業技術科」のコンセプトは基本的に同様ですが、「就業技術科」にはパイロット校として、より充実した施設・設備等施策的に優遇されている面があります。

「就業技術科」への応募資格は、知的障がいがある者（愛の手帳の所有者、または医師から知的障害があると診断された者）で、卒業後、手帳を使って障がい者枠での就労を目指す者となっています。そのディプロマの内容は、自立した社会人、職業人となるための資質・素養と基本技能を身につけることで、すべての教育活動が、このディプロマに向けてプログラムされています。教科の授業も実施されていますが、高等学校的な視点でいえば、すべてのカリキュラムを通じて、徹底的に就労準備教育を行っているイメージになります。

α学園の場合、職業に関する教科は、流通サービス系列（「ビルメンテナンスコース」「流通・都市農園芸サービスコース」）、家政福祉系列（「食品加工コース」「介護・コミュニケーションコース」）の2系列4コースがあり、事務・情報処理の学習が実施されています。最初に全コースの授業を体験し、2学年からは系列を選択、2学年後半からはコースを選択と、徐々に専門性を高めながら、授業数も1学年で週2日、2学年で週2日半、3学年で週3日のように、段階的に増加していきます。そして、事務・情報処理の学習は、所属コースに関わらず、全員が3年間しっかりと学ぶ、言わばハイブリッド型の学習システムをとっています。これは、卒業生の実績として、半数以上が事務一般職としての就労となることによります。これも、徹底して卒業後の具体的な就労に備えるとする、カリキュラムマネジメントの表れと言えるでしょう。

○ 徹底した就労準備教育

上記の4コースに合わせて、実習施設・設備が校内に整えられ、実務的な体験実習が日常的に行われています。

「ビルメンテナンスコース」では、校内全てが実習施設になります。十分な清掃用具が備えられた準備室には4S（整理・整頓・清潔・清掃）の合言葉が掲げられ、日々学校中の床、壁、窓をピカピカに磨き上げるトレーニングが行われます。

「流通・都市農園芸コース」では、バックヤードを模した実習室や農園、校舎外部の花壇などが実習施設になります。また、運送会社やスーパーへ出向いてのバックヤード実習も日常的に実施されています。

「食品加工コース」では校内にある本格的なカフェ施設を使って、ランチオープン、デザートオープンなどの営業が、保護者や地域住民対象に実施されます。しかし現在はコロナ禍のため、校内の教職員を主な対象として年数回実施しています。ランチオープンでは、ベテランのシェフの指導による本格的なランチコースが、接遇のベテラン講師の指導によるホールスタッフによって提供されます。また、コロナ禍における工夫として洋菓子とコーヒー紅茶をワゴンサービスする校内教職員対象の営業活動も行っており、時には「都市農園芸コース」で収穫された野菜や草花の販売なども行われます。

「介護・コミュニケーションコース」では、ベッドや車いす、洗濯設備などを備えた介護実習室や、ビジネスホテルの客室を模した実習室で実務実習が行われます。また、地域の高齢者施設と連携した様々な実習も行われています。

企業就労に向けての就業体験・現場実習も、計画的に実施されています。進路指導部スタッフによって開拓された多くの企業やハローワーク等の諸機関の協力によって、1学年では幅広い就業体験を経験し、2学年からは「職域への挑戦」⇒「求人への挑戦」という流れで、個々の生徒の希望や適性に合わせた現場実習が実施され、この流れの延長線上で就労先を決定していきます。

これ以外にも「職業」「キャリアガイダンスの時間」という授業が3年間それぞれ週1時間実施され、職業人として、社会人として必要な知識や素養を学んでいきます

○ 入校見守りを通して — 生徒たちの様子

都立学校にサーモカメラが配置され、すべての生徒の登校時の検温が行われるようになると、就業技術科240名の生徒のサーモチェックが、私の朝のルーティン業務となりました。当初はPCの画面を教職員側に向けて、「オッケーです。おはようございます」と一人ひとりに声がけをする形でしたが、コロナ対応が長期化し、始業時間が早まった時点で、サーモチェックと手指消毒確認等に人員を割けなくなったこともあって、サーモチェックは生徒の自己チェックへと移行し、私の役割もそれらの確認を含めた「入校見守り」へと変化しました。

肢体不自由部門の生徒が通学バスや保護者の送迎で通学しているのに対して、「就業技術科」の生徒は、自分の力で、公共交通機関および徒歩で通学しています。実はこの事も生徒の自立支援という教育目標において非常に重要な要素となっており、サーモチェックの自己チェックへの移行もそうした教育的な意味を含んでいます。

この「サーモチェック／入校見守り」業務を通じて、「就業技術科」の生徒の様子を観察することができます。かなり多くの生徒は、かつて私が勤務してきた都立高校に通学していても全く違和感がありません。定員を割っている都立高校が多い現状では、彼らは問題なく高校進学を選択できたと言えます。

それに対して、様々な障害特性に基づく行動を示す生徒がいます。靴を履き替えるという行為に時間のかかる生徒、一度教室に向かった後再び下駄箱に戻って確認することをルーティンとする生徒、あいさつの後に、必ずその日の天候などについてのコメントを伝えようとする生徒、雨天時に決められた自分の傘立ての所定の位置を探すのに長時間を要する生徒、毎日山のような荷物を小さな身体で背負ってくる生徒、検温後私の方に向き直り、正対して丁寧に深く礼をしてあいさつをする生徒など、独特の個性や行動特性のある生徒も少なくありません。またこれらの行動特性のうち、履き替えに長時間を要した生徒がいつの間にかスムーズに通過していくようになるなど、短期間で大きく成長していく姿を日々確認することもできます。

○ 徹底的に個を大切にす支援

α学園では1クラス10名が各学年8クラス、3学年で240名の生徒が定数です。これに対してクラス担任の他、2クラスに1名の副担任、各学年に3名の進路指導部担当者が配置され、クラスを持たない学年主任が全体を統括しています。さらに、スタッフ教員も含め60名以上の教員で、正に「一人ひとりに目が届く」体制がとられています。

私が着任時に職員室に入って最初に目に入ったのは、進路指導部の先生方のコーナーにある、細かく区切られ付箋等がたくさん貼られた3枚のホワイトボードでした。近づいてみると生徒一人ひとりの枠の中に写真が貼られ、個々の行動特性などが書かれ、これまでの職場見学先、現場実習先等が整理されており、言わば就労に向けた個人カルテの簡素版が「見える化」され、全教員が共有できるようになっていました。個人情報管理上のことが気にかかりましたが、高校の職員室と違って、生徒や保護者、来客が自由に出入りできないことが徹底され、情報漏洩などが起こらないことが担保されています。こうしたカルテに沿って、個々の最終的な就労先の決定に至るシステムが出来上がっています。

○ 部活動も重要なカリキュラムの一部

部活動も任意参加でなく、すべての生徒が一つの部活動を選択して3年間所属し、全教員および指導員の指導で、日々活動しています。このことはこの学校での部活動が、高等学校等の任意参加の部活動とは異なって、自立支援／就労支援のためのカリキュラムの一環であることを示しています。身体を鍛えたり、好きなことに熱中したり、情操を高めたりする以外に、個として自立し他者との関わりの中で、社会人、職業人として生きていくための人間力を、主に二つの意味で磨くことが目的であると考えられます。

一つには、先輩後輩関係も含め、他者と共に一つの活動に取組み切磋琢磨し、また協同して成功・失敗体験を積み上げていく経験の中から、人間関係力やコミュニケーション力を磨いていく事が期待されています。

もう一つは、校訓である「継続は力なり」を、3年間一つの部活動を続けるという形で体現していく経験です。もちろん、サッカー部のように全国大会常連となり、過去に全国制覇も成し遂げている面もあります。

○ 最後に

その他にも、生徒指導面や相談体制、学校行事など、生徒一人ひとりを大切にされた教育活動が日々展開されている学校ですが、こうした徹底した取組みを可能にしているのは、このタイプの学校が、東京都の特別支援教育のパイロット校であって、非常に恵まれた学校であるからということも付け加えておきます。

今、都立の進路多様な高校の多くが、都民から選ばれにくい状況が続いており、残念に思うと同時に、その改善策の実施を期待していますが、こうした特別支援パイロット校の「徹底的に個を大切にされた教育活動」から学ぶべきことが少なくないと考えております。

実践報告 Ⅲ

体験から学ぶアプライド・ドラマ

— 応用演劇ワークショップ実践報告

成澤布美子（演劇表現活動家）

<はじめに>

以下は、自分の子育てにアートを活用した実践者としての言葉と受け止めて頂ければ有難く思います。

1. 子育てとアプライド（応用）・ドラマ（演劇）

フリーアナウンサー、放送作家としてのキャリアから、子育て中に人形劇作りを始めたのだった。見てくれた子どもの笑顔が嬉しく、一緒に作っている仲間子ども達に励まされもした。子どもが何を感じ取ってくれるのか、真剣に向き合った時間でもあった。そこから親子で人形劇や市民劇、コンサートを一緒に作り上げる事業に取り組んだ。「子どもと大人の学び合い」の場所作りである。本格的に演劇を学びながら、自分の子どもの成長と共に表現活動も変化していった。子どもが中学生になれば、中学校演劇部の外部指導員となり、子ども達の抱えている問題にも直面する。「共生の心、多様性を受け入れる心を育むべきでは？」そう思ったのだった。

そこで出会ったのが「アプライド・ドラマ」、イギリス発祥のドラマ教育法である。物語の主人公が経験していく岐路から、三つの視点で物事を考える力・感じる力を養ってくれる、体験型演劇プログラムである。

一つは、主人公の視点。もう一つは、自分であったならばの視点。そして、他者の視点である。例えば…絵本「スイミー」の主人公は、こんな体験をし、こんな行動をした。自分であったなら

ば、どうする？あなただったら、どうかな？と問いかけ、グループで話し合う。少ない人数のほうが安心して話しやすい。ワークショップでは、ファシリテーターが、物語からプレ・テキストを作り、幾つかのタスクを用意する。タスクを出す場面は主人公の岐路。考えたその気持ちや行動を表現する時、身体表現、絵画、工作など、様々なアートを用いて誘導していく。そして一番大事なことは、ディスカッション。

その場での答えはない。多様性から自分で答えを探していく過程が「学び」なのだ。

住んでいる地域、小劇場を持つ川崎市アートセンターで始めた月一回のワークショップ「アプライド・ドラマシアター」も、今年11月で5年目を迎える。小学生から70代までの市民が参加し、子どもと大人が学び合う場所になっている。そして、私の故郷である栃木県足利市でも、1年前から小学校や生涯学習センターでワークショップを始めた。私見だが、アプライド・ドラマは小学校高学年からが有効のように思う。その実践例をご紹介します。



2. 例：絵本「スイミー」 作：レオ・レオニー 翻訳：谷川俊太郎

プレ・テキスト 成澤布美子

〈場面Ⅰ〉 *絵本の読み聞かせ (ここでは、物語の要約)

お話を始めます。大海原の片隅に、小さな赤い魚の群れがありました。その中に一匹だけ、真っ黒い魚がいました。名前はスイミー。ある日、赤い魚たちが大きなマグロに飲み込まれてしまいました。泳ぎが早いスイミーだけ、素早く逃げられ、海の深くに潜っていきました。

タスク① *ディスカッションでのタスク

ひとりぼっちになったスイミー。ひとりぼっちになったと感じた経験はありますか？
二人一組になって、そう感じた時のことを話してみてください。

*ここで大切なことは『安心して話せる場所』であると参加者が感じてくれることである。

〈場面Ⅱ〉

お話に戻ります。しょんぼりしていたスイミーでしたが、海の底には面白い生き物が沢山いました。「うわぁ、すごい！友達になりたいな」スイミーは、そう思いました。

タスク② *身体表現でのタスク

海の底の面白い生き物、どんな生き物がいると思いますか？5、6人のグループになって面白い生き物を作ってみてください。自己紹介して、「遊ぼう！」と誘ってみてください。

*大切なのは「想像力と身体表現」で、「グループでの達成感」が得られるようにすることである。

〈場面Ⅲ〉

お話に戻ります。元気になったスイミーは、小さな岩陰に隠れている小さな赤い魚たちを見つけます。「遊ぼう！」スイミーが声をかけると、一匹の魚が言いました。「大きな魚に食べられちゃうよ」スイミーは考えました。「そうだ！みんなで大きな魚の形をして泳ぐんだ。僕が目になるよ」群れで大きな赤い魚になった彼らは、冷たい朝の海を、昼の太陽が輝く海を、勢いよく泳いで行きます。彼らを食べようとする大きな魚たちは、寄っては来ませんでした。

タスク③ *自己啓発のタスク

お話は、これでおしまいです。スイミーは一匹だけ黒くて、なんだか仲間外れ。でも早く泳げて賢い。だから、海の底の面白い生き物たちと仲良くなれました。そして自分の知恵で仲間たちを守れたのでした。でも、それは仲間たちがいたからでもあります。

では質問！「集団と個」、自分だったら、どちらをより大切に思うか、考えてみてください。

3. 教育と演劇

ワークショップの最後のタスクは、会場の真ん中に線を引き、右が「集団」左が「個」（仮）とする。そして参加者に、自分が思う場所に立ってもらおう。ここで気をつけることは、どちらも大切に思う参加者が多いので、「右寄り、左寄り、真ん中もある」という選択肢を、先に提案すること。そして、今立った場所は「今」であり、「未来」は変わるかもしれない、ということだけはしっかり伝えることである。

このプレ・テキストを最初に考えたのは、イギリスのチェスター大学名誉教授であるアレン・オーエンズ氏で、コロナ禍以前は毎年、日本でドラマ・ティーチャーのためのワークショップを開催してくれていた。アレン教授のプレ・テキストは、文字通り、前のテキストであり、それをどのようにでもアレンジしてくださいとの意味である。自分なりにアレン教授のテキストを解釈し、アレンジしたものが上記である。

〈おわりに〉

私は「教育と演劇」はとても相性がいいと思っている。どちらも過程が大切であり、時間の経過が必要である。海外とは違い、日本には「演劇・ドラマ」の教科はない。日本人の身体表現が豊かとは言えない背景には、「慣れていない」ということが関係しているように感じる。また、集団の中で「本音」を伝える力、「本音」の他者を理解しようとする力にも「慣れていない」ように思う。

子ども達のまだ眠っている力を呼び覚まし、様々な教科に応用可能なドラマ教育法として、「アプライド・ドラマ」を広く知って頂きたいこと、そして自分の学びも含めて、今回、実践報告の機会をいただいたことを、心から感謝しております。

子ども像の考現学 (1) 「子どもの遊び」

深谷昌志 (東京成徳大学名誉教授)

○「遊ぶ」のが子どもらしさ

「遊びをせむとや生れけむ、戯れせむとや生まれけむ、遊ぶ子供の声きけば、我が身さえこそ動がるれ」「梁塵秘抄」は治承年間(1180年前後)に作られた歌謡集と聞く。

「我と来て 遊べや 親のない雀」は、3歳で生母と死別し、継母と不和だった一茶(1763-1827)が、子ども時代の淋しい心情を吐露したものと評価されている。遊びで心の空白を埋めようとする一茶の気持が心を打つ。

大田才次郎編の「日本児童遊戯集」(東洋文庫 122、平凡社、昭和 43 年)には、明治 34 年頃の各地の子どもの遊びが収集されている。東京の項を見ると、183 種類の遊びが並んでいる。筆者は昭和 10 年代半ばに、東京の下町で子ども時代を過ごしたが、「石蹴り」、「お山の大将」、「鬼ごっこ」、「かいぼり」、「手拭い引き」など、同書に収録されている 6 割以上の遊びに思い出がある。明治から大正、そして昭和へと、年上の子から年下の子へ、遊びが受け継がれていったのであろう。

多くの「自伝」を読んでいると、時代や地域を越えて、ほぼ全員が子ども時代の思い出として遊びに多くのスペースを割いている。例えば、社会主義者として知られる片山潜(安政 6 (1859) 年生まれ)は岡山の久米郡で子ども時代を過ごしている。そして、子ども時代の思い出として、木登りやかくれんぼ、ドジョウ掘りなどの紹介に多くのページを割いている。もっとも、田植えや田の草取り、芝刈りなど、多くの村人の中に加わった農作業の思い出も遊びに含めている。子どもにとっては、田植えも楽しいハレの日だったのであろう。

片山潜「自伝」 「日本人の自伝」 8 平凡社 1981 年

「鳴門秘帖」や「宮本武蔵」で知られる吉川英治(明治 25 年、横浜育ち)は、家の斜陽化や継母との不和など、苦勞の多い子ども時代を過ごしているが、自伝の中で、「童戯変遷」の章を設けて、遊びを回顧している。そして、メンコ、根っ木、ブランコ、縄跳び、ラムネの玉遊び、コマ、凧、石蹴り、竹馬、金輪廻しなどの遊びをあげている。根っ木や金輪廻しのように説明の必要な遊びもあるが、多くは現在でも通用する遊びである。そうした中で、「メンコや根っ木みたいな博打的遊戯は、決していいとはしていなかった。ぼくなども隠れてやっていた」(p 35) という。なお、「根っ木」は尖った棒で「釘刺し」と同じように地面を刺す遊びである。

吉川英治 「忘れ残りの記」 角川文庫 昭和 37 年

○遊びが変質した

多才な芸能活動を展開した小沢正一(昭和 4 年)は蒲田で子ども時代を過ごしたが、自伝の中で、「今すぐ思い出すものだけでも」と断りながら、おにごっこ、かくれんぼ、水雷艦長、西洋陣とり、押しくらまんじゅう、チャンバラごっこ、ドッジボール、探偵ごっこ石けりなど、74 の遊びをあげ、「まだまだ際限なくあるだろう。それに、駄菓子屋へ行く、紙芝居屋が来る。物売りが来る。(中略)あの頃の子どもは実によく外で遊んでいたものだ」(p 55) と回想している。それだけでは不足なのか、章を改めた「相撲メン 鯨の里編」で、「明けても暮れても、朝、昼、晩。夜は枕もとに積み重ね、何枚か手にしっかり握って寝たものだけ」(p 132) と、相撲メンへの傾倒ぶりを記述している。

小沢昭一 「わた史発掘」 文芸春秋社 昭和 53 年

小沢の子ども時代は昭和 10 年代であろうが、大人世代なら、そこに挙げられている遊びの大半に共感を持てるのではなかろうか。つまり、明治、大正、昭和と、時代を超えて遊びが継承され、

遊びには、共通のイメージが持たれているのであろう。かくれんぼや鬼ごっこが、その典型であろうが、遊びには、①屋外で、②何人かの子と、③体を動かすなどの特性が見られる。

それに対して、現在の子どもはどんな遊びをしているか。かくれんぼや鬼ごっこに興じる子どもの姿を見かけなくなっていて、すでに久しい。そして、遊びかどうかはともあれ、子どもはケータイやスマホ、ゲームなどに接して時間を費やしている。もちろん、子どもの回りにはテレビやマンガ、サウンドもある。

「テレビを見る」を、遊びに含めるかは意見の分かれるところであろう。「かくれんぼ」などの「群れ遊び」を子どもの遊びととらえるなら、子どもがテレビに見入り、かくれんぼなどをしなくなったから、遊びが「消滅」したことになる。しかし、鬼ごっこもテレビも自由な時間の使い方と考えるなら、子どもの遊びが「群れ型」から「孤立型」へ変質したことになる。これは「遊び」のとらえ方の問題となる。そして、スマホの時代を迎えて、遊びの孤立化がさらに進んだのが、現在の状況であろう。

○「豊かな遊び」から「貧しい遊び」へ

「遊び」には、多くの優れた先行研究があるが、ヨハン・ホイジンガは、ホモ・ルーデンス（遊ぶ人）の特性を「自発性」としているし、ロジェ・カイヨアも、遊びの特性として、「非生産性」や「不確定さ」と並んで、「強制されない自由さ」をあげている。

成人の場合、余暇は労働と対比されて捉えることが通例だが、たしかに「労働」は、収入を得るための拘束性を強いる活動なのに対して、「余暇」は拘束から解放された時間を自主的に自由に活用することを特性とする。そして子どもの場合、大人の「労働」にあたるものは「勉強」であろう。子どもは勉強をするために学校へ通うことを義務付けられ、学校では教師の指示に従って行動することが求められる。それに対して遊びは、子ども自身の自主的な営みという点で独自性を持つ。子どもが大人になる過程で、「指示に従う側面」と「自分で行動を起こす側面」との両面に身を置くことが重要ではなかろうか。

それだけに、現在の子どもの遊びが孤立型へ推移し、子どもの自主性を育てる場が少ないのが気になる。そこでもう一度、小沢昭一の描く遊びの世界に戻ってみよう。

「鬼ごっこ」でも「水雷艦長」でもいいが、遊びが、結果として子どもの心身双方の成長を促しているのに気づく。そうした遊びの効用を拾い上げると、①外で体を動かすから、健康を増進する。②遊びの中で、創意工夫を凝らすので、意欲が育つ。③友だちと遊ぶことを通して、人間関係の持ち方を覚える。それと同時に、④子どもだけで集団を作るので、集団での行動様式が身につく。あるいは、⑤遊びを通して気晴らしができる、などとなる。そうした意味で「群れ遊び」は、子どもの心身ともの成長を促す「豊かな遊び」と言えよう。

それに対して、テレビやスマホは、①体を動かさないし、②友も増えないし、まして、③集団的な行動も身につかないし、④創意工夫も少ない。したがって、子どもの成長に促さない「貧しい」遊びであろう。

○かつてのギャング集団の中での子どもの暮らし

「スタンド・バイ・ミー (1986年)」(映画)は、少年期の心情を描いた名画の一つだが、冒頭で、12歳の4人の男の子が、木の上に秘密の隠れ家を作る場面が登場する。隠れ家では、タバコを吸ったり、秘密の約束をしたりして、仲間意識を強め、その後死体探しに森に立ち入ることになる。

「スタンド・バイ・ミー」が心を打つのは、多くの人が、自分の子ども時代を連想するからであろう。映画ほど劇的ではなくとも、ある年齢から上の世代は「秘密の隠れ家」の思い出を持つのではないだろうか。そうした隠れ家には、①同性の異年齢の子が集まり、②固定したメンバーが、③

集団内に序列を作り、④集団としての決まりがあって、⑤縄張りを作って、⑤遊びの形で、時には逸脱行為を行う、などの特性を持っている。

子どものそうした姿が、アル・カポネに象徴されるシカゴのギャングを連想させることから、1920年代に、シカゴ大学の研究者が、群れを「ギャング集団」、群れを作りやすい年齢を「ギャング・エイジ」と名付けた。なお語源的には、「gang」いわゆるギャングは、「統率者の下にいる労働者や囚人の群れ」的な意味を持つことも付記しておく。

筆者は東京の上野駅の近くで少年時代を過ごしたが、隣家の物置が隠れ家で、8人で群れを作っていた。メンコを工夫したワッペンがメンバーの印で、隠れ家に入るときは、そのワッペンを示して、「エイ」というのが決まりだった。そして、下谷小学校までの500メートルほどの間に、8つの群れがあり、相互に親密や敵対の関係があった。小学低学年の「みそっかす」の子を保護するのも、メンバーの務めだった。みそっかすの子が他の群れからいじめられた時、放置すると意気地なしといわれるから、攻撃に向かう。当然、向こうも反撃してくるので、互いに緊張した毎日が続く。学校の登下校も、敵対する群れのいる地域を避けて、友好関係にある群れを選びながら通うのが日常であった。

そういえば、近くの不忍池から禁断の大きな鯉を取り、鯉を抱えて、広小路を走り抜けるのが、他のギャングに対するデモンストレーションの行為だった。それ以上に評価の高かったのは、校区の端に子分を待たせて、単身で、隣の金曾木小学校の校門の前に行って、大声で、「金曾木学校、ぼろ学校、よくよく見ても、ぼろ学校」と2回叫ぶ行為だった。その頃は校区内でも緊張を伴うのに、他校の校区は全く未知の敵地で、今の子がアメリカへ行く以上に、他の学校の校門に行くのは勇気のいる行為だった。そして、6年生になっても、「ぼろ学校」と叫べない子は「意気地なし」といわれ、仲間から蔑まれるのが常だった。

○「俗の文化」の中に身を置く

筆者は上野の老舗の下駄屋の姉2人を持つ一人息子の跡取りで、隣家の同じ年の義ちゃんは、小さな魚屋の7人きょうだいの5番目だった。そんな2人のウマが合うはずもなく、わがままで身勝手な筆者と、抜け目なく動く義ちゃんとはいさかいの日々で、それを乾物屋の武ちゃんが6年生として裁いてくれた。武ちゃんが高等科へ進んだ翌年は、足袋屋の憲ちゃんが大将になった。

下町の商店街なので、どの子にも「魚屋のケンちゃん」のように（お店の）呼び名がついていたが、低学年はミソッカスとして群れの回りを動き回り、中学年の下っ端を経て6年生になると、誰かが、がき大将となる決まりだった。そうした形で、どの子もイエの子からマチの子へと育っていた思いがする。とくに下町の親は家業で忙しく、子どもの群れに関わらなかったから、子どもたちは、群れ内外のトラブルを自分たちで解決する必要があった。中でも、友好関係にある群れが、他の群れからの襲撃を受けた時、どう援軍を出すかなどは神経を使う行為だった。

こうした子どもの群れは、昭和40年代に入って、家庭にテレビが普及する頃から姿を消すようになる。紙芝居の「黄金バット」よりテレビの「鉄腕アトム」の方が何倍も面白いので、子どもは家にこもる。その結果、紙芝居屋が廃業に追い込まれ、多くの駄菓子屋も店を閉めて、町から子どもの声が聞こえなくなった。今から半世紀も前のことである。したがって、ギャング・エイジの最後の体験者は、今は還暦世代であろうか。

もちろんその後でも、隠れ家を家の中に移したり、あるいは、男女混合の群れも出てくる。そして中学生の子もメンバーに残り、毎日でなく土曜日だけ集まるなど、群れの形を変えながら、昭和の終わり頃までギャング集団の姿があったように思う。したがって、40代位の方は、多少変形した形になるが、ギャング集団の最後の体験者なのかもしれない。

昔から、学校での優等生は、教師の指示に忠実に従う「指示待ちタイプ」で、社会に出てから挫折しやすいと言われたりする。しかし遊びのリーダーは、悪戯っ子を率いる行動派だけに、がき大将は社会で活躍するとも言われてきた。

たしかに「学校」は望ましいことを伝える「聖の文化」の上に成り立っている。それに対して、群れ遊びは「ギャング集団」の名の通りに逸脱性を含んだ「俗の文化」の色彩を伴う。どう考えてもメンコやベーゴマは賭け事だし、かいぼり（流れを止めて、水を掻い出して魚をとる）は田畑を荒らす遊びだった。駄菓子屋の万引きも常態化していたが、1回目は大目に見ても、何人かで繰り返すと、店のお婆ちゃんがすごい剣幕で叱る。子どもと駄菓子屋のお婆ちゃんとの間に、してはいけないことへの暗黙の了解があった気がする。かつての時代、子どもは、地域という実社会の中で、俗的な行為を繰り返しながら生き方を身につけていったのであろう。

○子どもの「フリー・デイ」の勧め

昨今、けん玉やベーゴマの復活を試みる動きを見聞する。その志は高く評価したいが、電子メディアの時代に、いまさらメンコやベーゴマでもない気がする。それに、鬼ごっこやかくれんぼの場も無いかもしれない。したがって、かつての遊びの再生は、郷愁の世界の再現にとどまり、現実的な意味を持たないように思われる。

その反面、いま、子どもが自分たちだけで過ごせる場や時間を持たないのが気がかりである。子どもは、家庭では親、学校では担任の目に守られている。塾や稽古ごとにも指導者（先生）がいる。子どもは、24時間、大人の目の届く環境の中で育っている。いわば無菌状態の実験室の中で培養されている状態なので、細菌への抵抗力に乏しく、生命力も低下していく。

しかし、子どもが成長するためには、大人の指示を待たずに、自分の判断で、そして可能なら、仲間と共に行動する体験を持つ必要があるのではなかろうか。

野鳥を保護するためには、サンクチュアリー（聖域）が必要だといわれる。外から鳥を観察し、環境に問題がなければそのままにするが、凶作で穀物などが不足している時は、家の軒先にくるみや脂身を置く。そして、サンクチュアリーに足を入れないようにする反面、水回りや下草の整理をして、環境の保全に努めることが大事にされる。

それと同じように、学校や家庭では、時として、子どもの行動に介入しないで、子どもの「サンクチュアリー（聖域）」を設定してはどうだろう。

具体的には、PTAが話し合っ、週に1日でも「フリー・デイ」を作ってはどうだろうか。その日をノー・ジューク・デイとし、学校は宿題を減らす。家庭も、夕方まで、子どもの外遊びを促す。また、地域のボランティアを募り、遊ぶ子どもを見守る仕組みを作る。校庭や公園、そして、企業や施設に子どもが遊べるフリー・スペースを設ける。老人ホームの開放もいいと思う。そうした試みを積み重ねれば、子どもは活動を通して、自主性を身につけるのではないか。子どものための「サンクチュアリー」（聖域）の設定である。実施にあたっては、費用はかからないから、学校と地域、家庭が一体となっ、放課後児童クラブや放課後子ども教室などが推進母体になれば、実現の可能も高まるであらう。

健やかな子どもの成長を願っ、フリー・デイの推進を強く求めたいと思っている。

（次回の子ども像の考現学（2）は、「子どもとは」を予定）

近況報告

○ 谷野敏子（[堺市教育センター勤務](#)）

アラブ首長国連邦のドバイから3月末に帰国しました。日本への入国規制が緩和され、ワクチン3回接種とPCR検査の陰性証明で、待機期間なく自宅に帰ることができました。コロナに始まり、コロナに終わった2年間のドバイ生活でしたが、いろいろ考えるいい機会になったと思っています。

4月からは、定年まで勤務していた堺市教育センターで週に4日働いています。私を含めて4人の小さな部署で幼児教育担当のお手伝いをしています。私が幼児教育に触れたのは園長経験の3年だけで、私がいた時にはセンターになかった部署ですので、大変心配でしたが、一から勉強するつもりでお引き受けしました。

堺市の公立幼稚園は現在8園で、来年度には4園になります。全廃の予定でしたが、市全体の幼児教育センター機能を担うということで4園残り、教育センターにもその担当部署が残りました。子ども青少年局と連携して、公立幼稚園だけでなく、幼保連携型認定子ども園・私立幼稚園など市内のすべての幼児教育を行う施設対象に研修等を行っています。ほかにも、2名だけですが、公立幼稚園の初任者指導も担当しています。

不安の多いスタートですが、楽しいことも見つけながら勉強していけたらと思っています。

○ 宮澤 長（[千葉市立誉田小学校](#)）

「子どもを保育園に早く送らないと仕事に間に合わない！」

「もう17時だ。保育園にお迎えに行ったら夕飯の準備をしないと寝かせるのが遅くなる！」

4月から3歳と1歳の子どもが保育園に通い、職場が保育園に近い僕が送り迎えをしています。常に時計を気にして、時間と戦っている毎日。とても充実しているけれど、常に家事、育児、仕事に追われて息継ぎができないような感覚もありました。

先日、僕が働いている小学校で運動会がありました。代休だった月曜日の日、僕の母が来て子どもたちの面倒を見てくれ、「たまにはゆっくりしたら」と言ってくれました。子どもたちが昼寝をしている午後、一人で数年ぶりに映画を観に行きました。見たのは重松清さんが原作の「とんび」という映画です。不器用な主人公の父親が、最愛の妻を亡くした後に子どものために精一杯生き、まっすぐに子どもを育てるといふ、父と子の絆を描いた物語でした。公開終了間近で、たまたま選んだ作品だったけれど、ずっと涙が止まりませんでした。

子どもと過ごす毎日はとても忙しいけれど、幸せなことだということに改めて気づき、映画を観ながら「子どもたちに早く会いたい」と思いました。

○ 斉藤貴英（[大阪府泉南郡 熊取町立熊取南中学校](#)）

この4月から、自分が20代から30代に教師として12年間、また教頭として3年間勤務した熊取南中学校（大阪府）に3回目の勤務となりました。他市の中学教頭、小学校教頭と教育委員会指導主事を含めて管理職経験12年目となり、夏目漱石の小説「坊ちゃん」以上に無鉄砲で素行不良だった自分もいよいよ教員人生の総仕上げの時期となりました。

30年前とは時代も大きく変わり、コロナで教育活動が制限される昨今、Society5.0の時代の協働的・個別最適化の学びを他校と同じように本校も進めています。「教科の知識・理解や思考力」とともに、その上で「物事の本質」を見抜く力を子どもたちに培い、オンラインなどのデジタル化が進化しても様々なことを「自分事としてとらえる広い視野」、「人の痛みがわかる優しい気持ち」と「未

来を変革していく強さ」を持てるような教育活動の工夫を今後も強く進めていきたいと考えています。

今日も校門の下校指導で、一人ひとりの子どもたちと笑顔で挨拶を交わしつつ、そんなことを考えていました。こんな時代だからこそ周りの人を幸せにするために、熱く生きたいですね。

○ 谷本久典（[雙葉小学校](#) 教諭）

— コロナ禍3年目を迎えて —

依然コロナ禍にある日本では、感染症対策を講じながら生活を送っています。学校現場では、少しずつ従来のやり方に近づけようとしたり、抜本的に見直しをしてアップデートを図ったりしています。特に学校行事は、子供たちにとって大切な学びや成長の機会です。どの学校行事においても、子供たちの思いを大切にしながら、今年度版を考えています。しかし、判断が難しかったり、直前で変更を余儀なくされたりすることもあります。コロナの完全な収束を待つのではなく **with** コロナの状況で、何ができるのかを日々考えていくことが大切だと感じています。

また、マスクによる弊害もあります。特に感じているのは、マスクで子供たちの表情が読み取りづらくなったことです。これは教師だけではなく、子供たち同士でも同様のことを感じていると思われれます。相手の表情が読み取れないのが原因でトラブルに発展するケースが増えてきていると聞いたことがあります。授業では、子供たちの表情を目元から判断しなければならないので、とても苦勞します。自分の思いや考えを声に出せる子の気持ちはこちらに届きやすいですが、もちろん全員がそういった性格ではありません。これまでよりも机間指導の際に、表情をよく見たり、声をかけたりすることが大切になっていると感じます。子供たちの心の声をしっかりとキャッチできるようにアンテナを張って授業に臨みたいと思います。

句会 むさしの

○逢うた朝別れ一期の花月夜

安田 勝彦

散る花やひとり時間の夕ごはん

葉桜や天指す巨き平和像

俳句は「あいさつ」ですと教えられ、折々にあいさつ句を詠んでいましたが、身近な家内のあいさつ句を詠むとは考えてもおりませんでした。入院をしていたものの、3月28日に永眠をいたしました。惜別の一句と一人になった気持ちの一句、平和の願いをこめて、北区にある長崎の平和の像の原型の像の前での一句です。深谷昌志先生をはじめ皆さまとのご交誼に心から感謝申し上げます。有難うございました。

○凍て土に沁みいるやうに涙落つ

市原 潤

涙落つところほぐしてゆくやうに

ウクライナの子どもたちの涙は、見るだに痛ましい。しかし、涙は凍て土に染み入り、やがて凍土を溶かし、地中に生まれる小さな流れは大河となって、再び豊かな大地をつくるだろう。彼らの両親や祖父母がそうしてきたように、涙は兵器ではなく言葉となって再び新しい世界をつくるに違いない。

○戦争を知らぬ子どもでいたかった

上島 博

子守唄ざわわざわと麦の秋

「戦争を知らない子どもたち」と言ったって、大戦後も世界各地では戦争、紛争、テロ、虐殺、冷戦など絶えたことはありません。しかし、平穏な日常とアメリカ側の視点に慣れ過ぎてしまった私には、遠い国の気の毒な人たちとしか感じられていませんでした。今回初めて、侵略される側からリアルタイムで戦争が起き戦況が移っていくのを目の当たりにして、もう戦争を知らない子どもではなくなったのだと気づきました。

ウクライナも高緯度地方なので、四季の移ろいが豊かだと思います。行ったこともない、かの地に私が今いたら、どんな句を詠むだろうかと想像して作ったのが2句目です。もちろん、寺島尚彦「さとうきび畑」のオマージュです。

歳時記を繰っていたら、水原秋桜子のこんな句も見つけました。原爆で破壊された浦上天主堂を詠んだ句だそうです。

麦秋の中なるが悲し聖廢墟

編集後記

「風の便り」を発行するとき、いつもネット時代のありがたさを思っています。何度発行しても、さくらインターネット(業者)に年間1万円程度の使用料を払うだけ。紙での発行なら、編集作業、送付作業の手間は無論、印刷費、郵送料と大変な額になるでしょう。また商業誌なら、原稿のご依頼作業は無論、ページ数の調整やレイアウト、締め切り日近くの作業の大変さなど、何人もの人手を要する仕事でしょう。年間に本誌4回、臨増4回のニューズレターの刊行も、筆者のご協力さえあれば、簡単にできてしまいます。欧米の理系の学会誌での例を聞いて、思い付きで始めた「学びだけでなく遊びもある」ニューズレターの試みでした。6月号は、とりわけリッチな「実践報告」が収録されているように思います。どうぞ今後ともご愛読のほどをお願い申し上げます。

(深谷和子：kazukofukaya@nifty.com)

〈編集委員〉

深谷和子(長)・湯浅俊夫・上島博・清文枝・土田雄一・大高志芳・吉野真弓・細江久美子

〈「風の便り」 2022年6月号目次〉

今月の軽井沢	フジとツツジ咲く公園にて	細江久美子
今月の詩	「不能・恋する青年のいる」大岡信	ゆあさとしお
実践報告 I	ことばのキャッチボールで変容していく1年生 —支援員としての関わりの日々から	川崎佳子
実践報告 II	先進的な特別支援学校の現場から	宮川隆史
実践報告 III	体験から学ぶアプライド・ドラマ —応用演劇ワークショップ実践報告	成澤布美子
子ども研究ノート	子ども像の考現学(1)「子どもの遊び」	深谷昌志
会員談話室		
近況報告	谷野敏子、宮澤 長、斉藤貴英、谷本久典	
句会 むさしの	安田勝彦、市原 潤、上島博	
編集後記		深谷和子
校正		上島 博